

し ょ う わ つ う し ん

Show-a 通信

2015.10
第17号

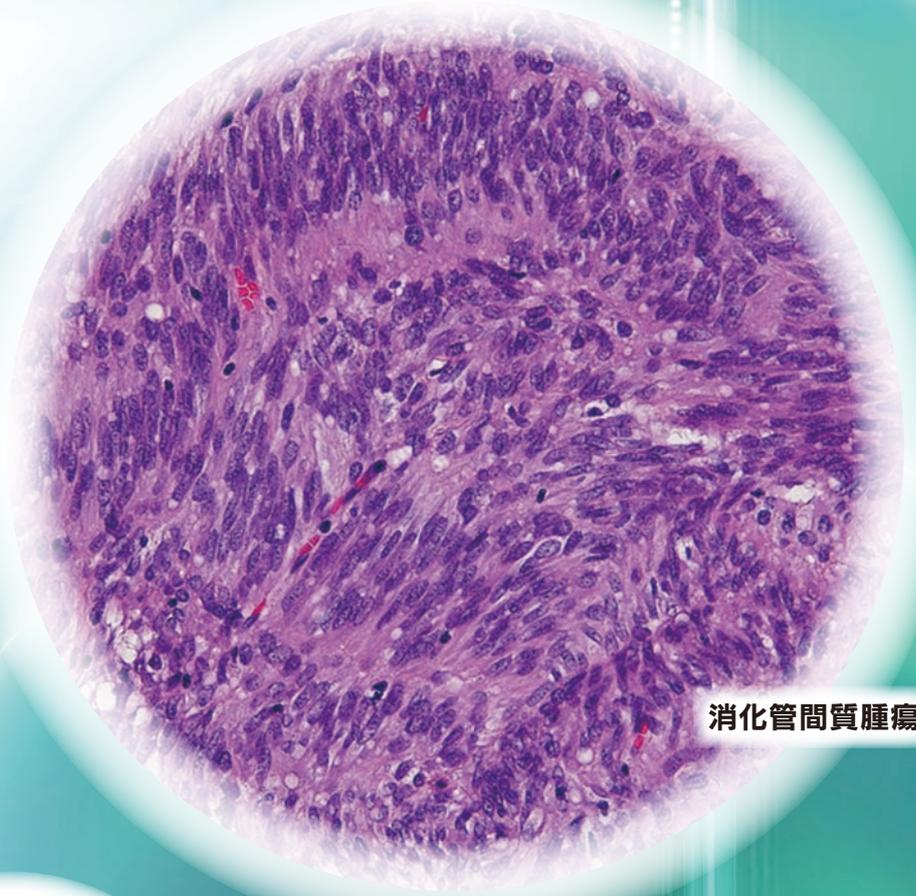
北海道消化器科病院は消化器病分野の最先端治療で地域医療に貢献しています。

医療法人彰和会の「彰和 (Showa)」と明らかにするという意味の「Show」を合わせて、「Show-a通信」としました。
私たちの仕事をお知らせすることで、消化器科領域の最新医療をお伝えします。

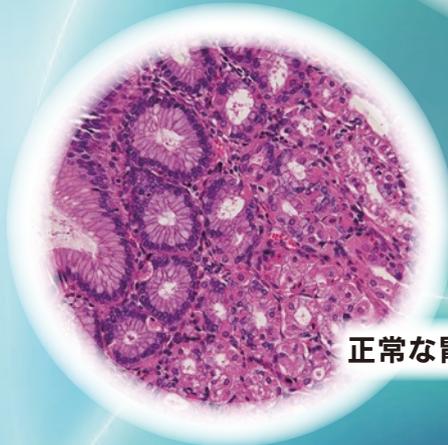
消化管間質腫瘍

超音波内視鏡下穿刺吸引法で確定診断

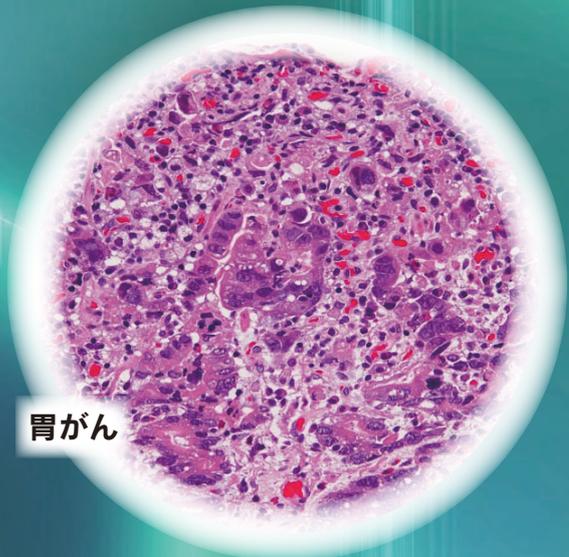
内科・消化器内科
理事長・院長 堀田 彰一



消化管間質腫瘍



正常な胃粘膜



胃がん

10万人に1、2人

早期発見が難しい

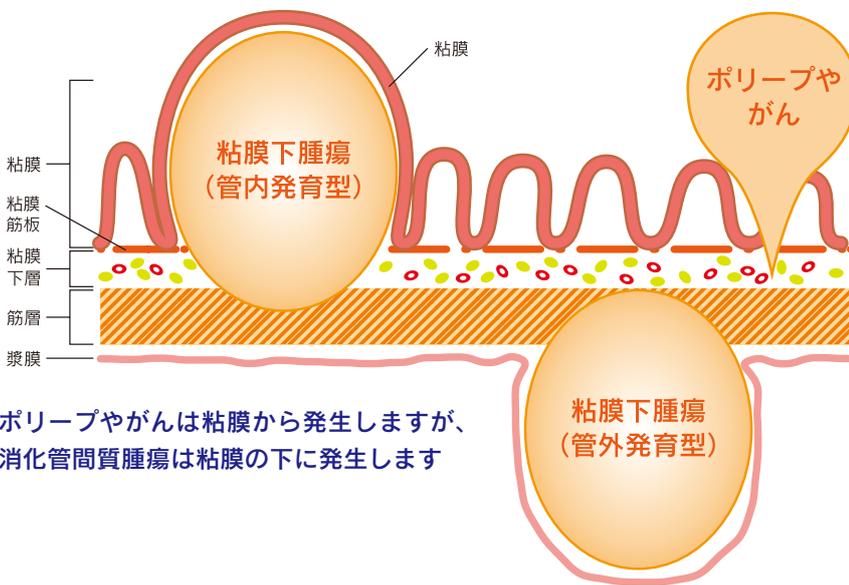
2cmでも高リスク

消化管間質腫瘍 GIST:ジスト

(Gastrointestinal Stromal Tumor)

超音波内視鏡下穿刺吸引法 (EUS-FNA) で確定診断

消化管間質腫瘍は、食道・胃・小腸・大腸などの粘膜下に発生する腫瘍の一種で、発生頻度は10万人に1、2人という希少がんです。2008年にガイドラインの第1版が出版されるなど、この10年で飛躍的に疾患への理解が深まり、検査や治療法も大きく進歩しています。



ポリープやがんは粘膜から発生しますが、消化管間質腫瘍は粘膜の下に発生します

消化管間質腫瘍は消化管の粘膜下（消化管壁の中）に発生する希少がんの一種で、粘膜から発生する胃がんや大腸がんとは性質や進行の仕方、検査や治療法も異なります。

消化管間質腫瘍の診断には、通常の内視鏡検査ではなく、超音波内視鏡下穿刺吸引法を用います。専門装置と熟練した手技が必要ですが、消化器領域の専門病院である当院には十分な経験と実績があります。

患者さんは50〜60代に多く、進行するまでは症状が出にくいことから、健康診断やほかの疾患の検査で偶然に発見されることも少なくありません。

超音波内視鏡下穿刺吸引法で組織を採取し診断します



内科・消化器内科

理事長・院長 **堀田 彰一**

北海道大学医学部卒業
北海道大学病院放射線科、KKR札幌医療センター斗南病院放射線科、JA北海道厚生連札幌厚生病院消化器科を経て、1988年2月に北海道消化器科病院を開院

【学会認定資格など】

超音波学会指導医
日本消化器内視鏡学会専門医・指導医
日本消化器病学会認定医・指導医・評議員
日本臨床腫瘍学会暫定指導医
日本大腸肛門病学会指導医ほか

小さくても転移を来す可能性があります

通常の粘膜下腫瘍の場合は3cmまでなら、増大や形状の変化がないかを注意しながら経過観察することが多いのですが、当院の手術症例の中には「転移を来すリスクをもった2cmの消化管間質腫瘍」がありました。腫瘍径が小さくても、消化管間質腫瘍であれば外科手術などの積極的な治療が必要であると考えています。適切な時期に適切な外科治療を行えば、完全治癒を目指すことができます。

転移・再発には分子標的治療薬を

手術後は、再発のリスクにに応じて分子標的治療薬での治療を検討します。近年、分子標的治療薬にも新薬が登場し、選択肢が増えたことで延命できるケースも増えていきます。

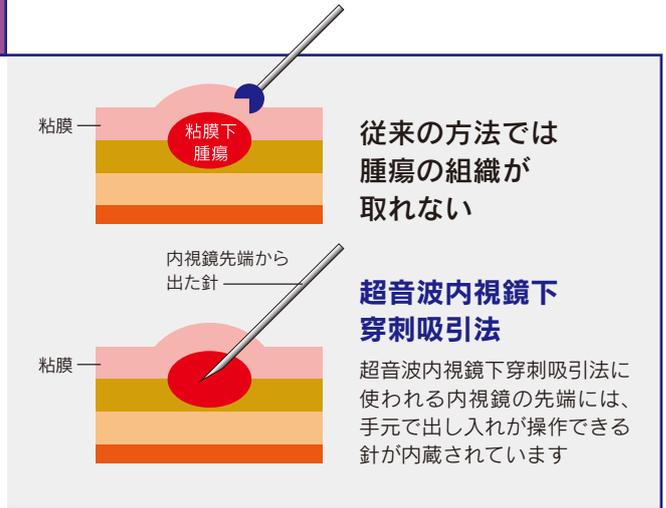
しかし、約3割の患者さんに肝臓や腹膜への転移が見られます。再発をいち早く見つけるためには専門的な視点での経過観察が必要です。

当院では、院外医療機関からの検査依頼にも対応しています。

超音波内視鏡下穿刺吸引法

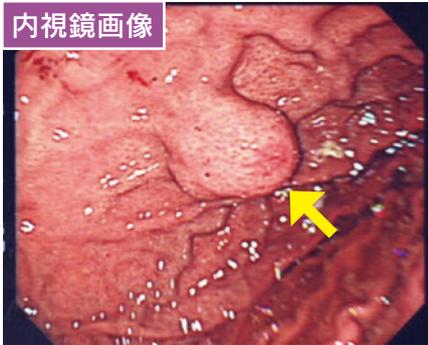
消化管間質腫瘍は、饅頭のおんこのように正常粘膜に覆われています。そのため、超音波で腫瘍の位置を観察できる「超音波内視鏡下穿刺吸引法」で組織を採取します。

- ①胃カメラと同じように、口から内視鏡を挿入します
- ②胃に到達したら、超音波で粘膜下にある腫瘍の位置を観察します
- ③病変を超音波画像で確認しながら、細い針を刺し、細胞や組織の一部を採取（生検）し、顕微鏡下で検査（病理検査）を行います

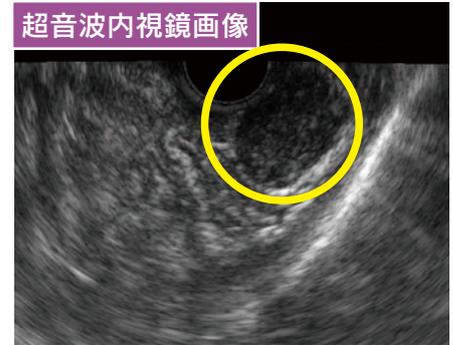


症例. 50歳代男性

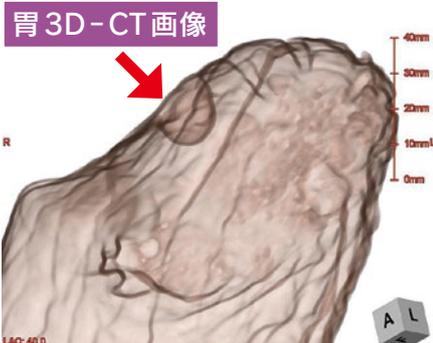
転移を来す高リスクの
消化管間質腫瘍
(腫瘍径約2cm)



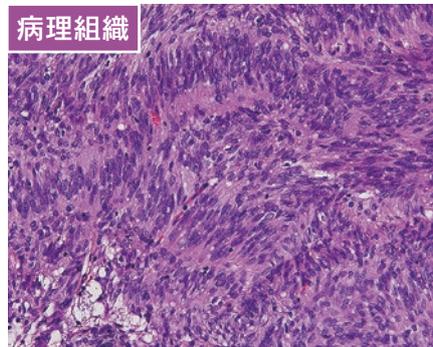
胃の正常粘膜に被われた直径約2cmの粘膜下腫瘍



胃壁内に腫瘍を認めます (○印内)



CT三次元画像で映像化した消化管間質腫瘍

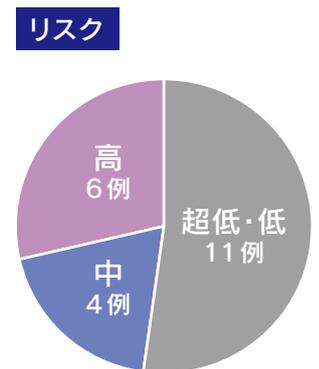
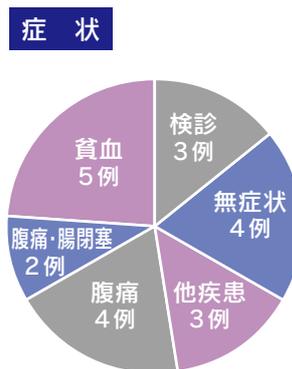
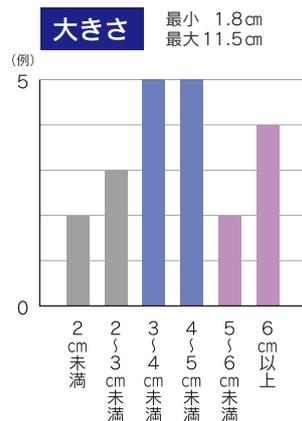
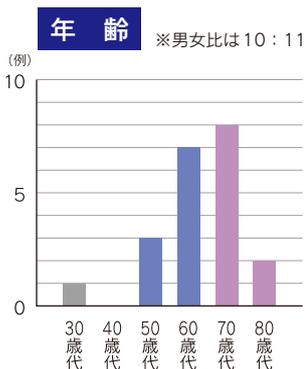


特有の紡錘形細胞型を持っている



正常粘膜に覆われた消化管間質腫瘍の断面

北海道消化器科病院 消化管間質腫瘍手術実績 2012年1月～2014年12月【21例】



医療技術を向上させるため
職員全員がつねに学び続けています

5/28 第1回 緩和ケア症例検討会

◆テーマ「長期にわたり治療を続けている
大腸がんの患者さんとの関わり」

講師：北海道大学病院
緩和ケアチーム
田巻知宏先生



6/11 医療機器安全研修

◆講演「ペースメーカーと
電気メスEMI（電磁干渉）に
ついて」

講師：日本メドトロニック
株式会社
加藤芳規先生



7/2 CVポート勉強会

◆講演「CVポート全般について」

講師：北海道消化器科病院 外科 医長
檜崎肇



◆講演「CVポートの使用と管理」

講師：北海道消化器科病院
がん化学療法認定看護師
松永かおり



Show-a Topics

薬
劑
部

外来がん治療認定薬剤師として
2人が認定されました

北海道では数少ない認定者

外来がん治療認定薬剤師は外来化学療法の知識や技術を有し、分子標的薬や経口抗がん剤などの新薬の使用にも適切に対応できる能力を備えた薬剤師です。日本臨床腫瘍薬学会が制度を創設し、2014年から認定者を輩出しています。

12年のキャリアを持つ地主隆文薬剤師は「今まで実践してきた仕事の根拠を改めて学ぶ機会になりました。養成講座で学んだことをスタッフに伝達講習し、薬剤部全体のスキルをさらに高めたいです。化学療法中の患者さんには、副作用を我慢せず、気軽に相談していただきたいと思っています」と話し、6年目の鈴木直哉薬剤師は「在宅で経口抗がん剤を

服用している患者さんとは接点が少なくなりがちなことから、患者さんからの電話での問い合わせに迅速に対応するなどのフォロー体制を整えたい」と意欲を示します。

副作用の早期発見と安心を提供

医師や看護師から患者情報を入力するだけでなく、必要に応じ外来化学療法室で患者さんに問診で投与前チェックを行い、体調の変化や副作用の早期発見に努めます。抗がん剤の調製や投与中の観察、服薬指導を丁寧に行うなど、化学療法が有効で安全に継続できるように、安心な薬剤の選択や提案をサポートします。



(左から) 鈴木薬剤師、地主薬剤師



化学療法室



外来ミキシングルーム



新薬の開発で
選択肢が増えている抗がん剤



医療法人 彰和会
HGH 北海道消化器科病院

消化器内科、腫瘍内科、内科、消化器外科、外科、肛門外科、
放射線科、麻酔科、病理診断科

□設立：1988年2月20日
□住所：札幌市東区本町1条1丁目2番10号
□電話：011-784-1811 □FAX：011-784-1838
□ホームページ：http://www.hgh.or.jp/
□病床数：211床